
巖島探偵事務所物語

poo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巖島探偵事務所物語

【ZPDF】

N84970

【作者名】

poo

【あらすじ】

探偵事務所になりゆきで助手として働くことになった。おっさんと所長を務める少女のある事件の物語

第一話（前書き）

もともと読みきりで投稿しようと思っていた作品をなかなか書きあがらないので分けて投稿することにしたものです。

第一話

巖島探偵事務所物語

「京さん。コーヒーに置いておきますね」

「うん。分かった」

目の前のリクライニングチェアに座っている人物、巖島 京との出会いはかれこれ半年前のことになる。

当時俺は大手コンピューターソフト開発会社に勤めていた。自分で言つのもなんだが結構優秀なプログラマーだった。そこそこ大きな仕事も任せられていい給料ももらつて三十過ぎても女の噂もない以外は悠々自適に暮らしていた。しかしそんな口常に突然終わりが来た。

ドンドンッ！… ドンドンッ！…

「すいません。山本さん、山本 明さんのお宅ですよね？すいませんがあけてもらえますか？」

「はーーい」

ここで無用心にもドアを開けたのが俺の転落人生の始まりだった。

・・・まあ、開けなくとも同じだつただろうが。

「すいませんが、金を返してもらえませんかね？」

「は？」

訳がわからなかつた。そこそこ稼いでいるし、浪費癖のあるわけでもない自分に何故借金があるのか？

「いやいや。とぼけられても困るんですわ。」

勇作さんの連帯保証人にあるあなたの名前があるでしょ？」「

訳がわからない！！そこに記された大学時代のサークル仲間の名前を見て混乱がピークに達し思わず大声を上げた。

「知らないよそんなもの！！！俺はそんな書類にサインも印鑑も押した覚えはない！！帰ってくれ！！」

「そんなこと言われても困るんですね——」

「知らないものは知らん！！こんなところで下らんこといつてるな

ら田上を探して来い！！」

「そう言われても夜逃げされちまつたんでね。一千万・・・・一千万だよ。耳そろえてあんたが返してくれれば済む話なんだよーーー！」

突然大声で威嚇して

「返してもらつまでも願いしに来るわ」

といつて帰つていった。

それから二ヶ月間家に来る取立てを無視し続けたが、とうとう仕事場に現れるようになってしまった。二ヶ月後にはこれ以上会社にこんな人間を呼び寄せられては困るといわれて、十年間働いた会社をクビになってしまった。

その後もしつこい取立ては続き、田雇いの仕事で食いつないでいた俺の目の前に一枚のチラシが落ちていた。

「大きな事件からペット探しまで何でも」相談ください。

価格は要相談

厳島探偵事務所 (TEL) 03-xxxx-xxxx

よく分からぬ上にあまり内容もないチラシだったが藁にも縋る思いで電話をかけた。よくよく冷静になつて後で考えてみるとなん

で弁護士事務所じゃなく探偵事務所に電話したのだろうか？京さんに言わせると

「人の行動は大体の場合もとは理由も何もないんだよ。理由は結果が出てから肉付けされる付隨物に過ぎない。なんせ過程はどうあがいても結果にはなり得ないからね」

だそうだ。

言われたとおりに事務所のあるビルに入り事務所のドアをたいた。

「どうぞ」

凛としたまだ若い少女のような声を聞いて少し不安になつたが乗りかかった船と思い、思い切つて中に入った。そこにはスーツを着こなしたまだ若い女性が座つていた。

「どうも。厳島探偵事務所所長の厳島 京です。山本 明さんですね？」

「はい」

「では今回の依頼の内容を」

そう促されて、俺はこれまでのことを目の前の人物に話した。すると京さんは面白そうに笑つてこう言い放つた。

「山本 明さん。これからこの探偵事務所で助手として働かないかい？」

これががきつかけで俺は自分よりも十歳以上歳の離れた少女に借金を肩代わりしてもらつたうえに職まで与えてもううことになつたのだが自分で言つていて情けなくなつてくる。しかしおいしい話ばか

これががきつかけで俺は自分よりも十歳以上歳の離れた少女に借金を肩代わりしてもらつたうえに職まで与えてもううことになつたのだが自分で言つていて情けなくなつてくる。しかしおいしい話ばか

りではない。この少女見田麗しい見かけと反比例するかのように生活能力が低いのだ。しかも、片付けなどの整理はできるから実際に近くでいる時間が長くないと発覚しないという問題児なのだ。得意料理力ツラーメンというのは将来が心配でならない。よつて基本的に家事などは助手である俺がするのだが……」これは探偵助手の仕事に入るのだろうか？家政婦としての給金はもらえないのだろうか？

そんなこんなで今に至る。家事スキルAを持つていると自認する俺だがまだ探偵業務には慣れていない。でもこれは理不尽だと思つ。

「山本さん！猫を探すのになんで一ヶ月もかかるんですか！？」

いや、猫つて結構見つかんないものだよ？

などと思うのだがこの少女はどうも俺に自分と同レベルの技能を求めているようで……

「うちでは猫探しは基本三日で見つけるんです！！」

などと普段の冷静な面持ちを崩して怒鳴つてくる。いつも超然とした態度なので初めは新鮮な驚きがあつたが今は子供を見守る親の気分で微笑ましく思いながら表情は真剣に反省の色を見せてくる。

・しかし迷子の猫を聞き込みもしないでどうやって三日で捕まえているのだろうか？

そんなくだらない日々をなんだかんだ言つて満喫している自分を省みて半年前には想像もつかなかつたと思い思わず

「平和だな」

などとおっさん臭いことを口走つたが良く考えると

「あなたはもうおっさんですよ山本さん」

京さんが口を挟んでくる。

「なんでこのタイミングで発言できるんですか？読心術でも習得してるんですか？」

そう尋ねると京さんは自信満々にこう言い放つた。

「明智さんは私の助手ですから。助手の考えてることくらい分かるんですよ」

さも当然のように言い放つているが、理由になつてない。

「まあ。ただそんなことを考えてそうな瀧無い顔をしてたからなんですけどね」

「それは追い討ちをかけたことになるつて分かつてやつた顔ですね」

「よく分かつたね」

分かるに決まつている。いつこうとをするときの彼女の顔は心底面白そうにしているからだ。

そんな不毛なやり取りをしていくうちに今日も夜八時に事務所の時計の鐘が鳴り挨拶をしてから俺は安アパートへ帰宅の途についた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8497o/>

巖島探偵事務所物語

2010年11月15日18時10分発行